平成２８年度第１回文化芸術に関する意見交換会　会議概要

１　日時　平成２８年１１月２５日（金）　１０時～１２時３０分
２　会場　別所公民館　講座室　他
３　出席者（50 音順　敬称略）
＜委員＞
石上　城行／石川　護／五十嵐　健一／井藤　仁／おかべ　りか／久米　尚子／雑賀　吉人／文園　敏郎／山口　聖子／吉成　彪
＜事務局＞
金子スポーツ文化局長／大西文化振興課長／海津文化振興係長／柳沢主任／飯島主事
芹沢さいたまトリエンナーレ２０１６ディレクター

４　テーマ
（１）さいたま市文化芸術都市創造計画平成 27 年度施策集、平成 28 年度施策集暫定版について
（２）さいたまトリエンナーレ２０１６について
公開又は非公開の別　公開
５　傍聴人の数　０人
６　会議
（１）開会
（２）局長挨拶
（３）新規委員紹介
（４）議事概要

委員長	次第４テーマ　さいたま市文化芸術都市創造計画 平成27年度施策集、平成28年度施策集暫定版について、事務局より説明をお願いしたい。
事務局	＜事務局より説明＞ ・資料１－１，１－２に基づき説明 ・この後の視察も含め、資料２に意見を記入の上、提出を依頼 ・新たな視点での意見、トリエンナーレに対する意見等、お寄せいただきたい。
委員長	意見書に書いて、提出とのことである。
事務局	少し時間があるので、質問があれば受ける。

	これだけは聞いておきたいということはあるか。
委員	ここ２～３年、近くの公民館でチラシを見かけるのだが、岩槻の時代行列のイベントがある。出演者ボランティアを募り、腰元や侍、お殿様等の衣装を着て、岩槻で行列をするイベントである。一人で２から３キロの装束を身に付け、４キロ歩けることが条件のものである。これは、施策集の関連事業に入らないのか？すごく面白いアイデアで良いと思っている。
事務局	鷹狩行例のことだと思われる。
委員	こんなに人の目を引いて楽しそうなイベントなので、資源として活用しないともったいない。
事務局	地域資源を使い行っている事業であり、施策集の中に記載している。
委員	資料１－１、１－２には入っていないだけか？
事務局	以前から実施されている事業は、資料１－１の事業の増減としては記載されていないだけで、施策集には記載がある。
委員	城下町で実施されているすごく素敵な事業である。
委員長	施策集に反映されているか、厚い中から探すのは困難である。もう少し見やすい方法はないものかと思う。 以上で、（１）施策集について終了する。 続いて、（２）さいたまトリエンナーレ２０１６についてであるが、最初に芹沢ディレクターに概要をお話しいただき、その後、トリエンナーレ会場に移動する。
事務局	芹沢ディレクターを紹介する。別府現代芸術フェスティバルの総合ディレクター、とかち国際現代アート展、横浜トリエンナーレ等、数々の芸術祭に御尽力いただいている。さいたまトリエンナーレでは、企画、アーティストの選定等を担っていただいている。
芹沢ディレクター	さいたまトリエンナーレ２０１６は、実行委員会が主催する事業、市の主催事業を多様に組み合わせて出来ている。中身については細かく説明する時間がないため、今日配布した最新のパンフレットを御覧いただきたい。今回、国内外の３４組のアーティストを呼んでいる。 テーマ「未来の発見！」については、ディレクター就任の話があった時に、「さいたま市とはどのようなところか」から始めたいと思った。昨今は全国で国際芸術祭が開かれており、問題も見えてきている。今年もたくさん開催されている。その中で、

	政令指定都市さいたま市がどのような形で芸術祭に臨むべきかを考え、やはり「さいたま市とはどのようなところか」から始めたいと思った。調べてみると、とにかく多くの人が住んでいて、日本の生活がここにある、という点が印象深かった。そこで、東京という巨大都市のすぐ横にあり、毎朝大量の人が東京に移動し、夜になると戻ってくる「生活都市」と位置付けた。 日常や生活は我々の根幹となっている大事なことだが、同時に日常という意味であまりに慣れてしまっている、繰り返されている現場である。むしろ、想像力、感性が委縮しがちな場所でもあると思っている。すごくきれいなものが横にあるのに、日々あまりに見慣れてしまっているので、あえて美しいと言わなくなることや、忙しい中で放っておいたらまずいことを後で考えようと思ってしまうこと。日常は基盤であるがゆえに、想像力を生活の現場に入れていきたいと強く思った。 「未来の発見」というテーマにしたのは、アーティストが未来を発見してくれることではなく、アーティストの想像力に触れることで一人一人の想像力が刺激されて、こんな世界の見方があってもよいのでは、と思ってくれたり、参加してくれる人がいるトリエンナーレにしたいと思ったからだ。 「共につくる、参加する」ということも、出来上がっている作品を持ってきて設置するのではなく、創造のプロセスに参加できるように開いた作り方をしていこうと考え、全て新作に取り組んだ。なぜ現代アートかというと、作っているアーティストは同時代を生きている。せっかくなのでさいたま市に来てもらい、新作の構想を最初に練るところから市民の人達と一緒にやってく形を押し通した。関心を持ってくださるサポーターの市民の方などとアーティストが交流できるような場をなるべくたくさん作り、実際に制作をいろいろな形で助けていただき、ここまで来た。 エリアは大きく３つを設定した。与野本町駅から大宮駅エリアは賃料が高く、７９日間借りようとすると金額的に大変だったため、公共施設の使われていない部分である、大宮区役所の地下や市民会館おおみやのレストランを借りた。結果論だが、昭和４０年くらいに建てられ、そろそろ限界が来るもの、取り壊され新しくなっていくはずのもの、そのような意味で都市へのオマージュというのか、消えていく風景に対して、また建物に

	対するお礼も含め、建物に入ってもらう機会を作った。アートイベントとして、大きなドームであったり、大友良英の市民参加型のコンサートであったりと、何月何日のどこそこで何が起こるという形で、与野本町から大宮エリアは企画を組み立てた。 武蔵浦和駅から中浦和駅エリアは歩いて回るところで、先ほどさいたま市を生活都市と位置付けたが、それを一番象徴する形で住宅街を使いたいと思った。花と緑の散歩道自体をアートの道として位置づけ、中間あたりにある、今は使われていない住宅の旧部長公舎４棟を借り、４組のアーティストがそれぞれ展示を行った。 岩槻駅周辺エリアは、埼玉県立の博物館であった旧民俗文化センターがあり、ここは駅から離れているため、シャトルバスでつないだ。ここはどこだ、という不思議な感覚におそわれる建物で、１棟の建物の中で集中して作品が見られるようにした。 同時に、岩槻は人形のまち、城下町としても長い歴史を持っていることも含めながら、岩槻の人々と一緒にやっていく方法をとろうと考え、人形の東玉さんの社員寮を借りて、世界的に注目されている方法「アーティスト・イン・レジデンス」を実施した。これは、アーティストに滞在してもらい、住民と交流しながら作品を作っていく方法で、世界中で実施されている。ここでは社員寮に泊まりながら作品を制作し、１１月３日からその作品を公開するという拠点を作った。また、駅近くに一軒の民家を借りて、ピアニストの向井山朋子が作品を発表している。 このように３つの性格の違う地区を作った。その他に、浦和の映画館を会場にしたり、うらわ美術館にさいたま市はどのようなところかを調べた結果を展示したり、アートステーションという、スタッフ達も使う場所で展示を行ったりした。全体では、さいたま市の様々なところに作品が点在するという形で作ったが、メインにはその３か所を選んだ。 私及びプロジェクトディレクターが直接行っていく部分以外では、この他に、市民の人達がこれを作りたいといったときに参加できるような市民プロジェクトの枠、さいたま市の直営かは別として、市内に文化施設はたくさんあるが、県立近代美術館や芸術劇場など、トリエンナーレがあってもなくても普段から優れた活動をしているところとは、連携プロジェクトとして、トリエンナーレと関係のある企画を展開してもらい、開催期間

	中に７０から８０のプロジェクトがさいたま市内でいろいろ展開されている。
委員長	ただいまの説明で、質問等あるか。
委員	第１回目ということで、我々もトリエンナーレそのものが分かわからなかったところがある。私は岩槻区在住であるが、旧民俗文化センターは、昔はある資産家の別荘地であった。地元でやっているだけに、みなに行って見てこいよ、と言うのだが、どうだったかを聞くと、理解できない、難しすぎて分からないという人が圧倒的に多い。思うのだが、第１回目だからと言うが、最初なら、もっと取り組みやすいものであったり、せっかく良い芸術なのだから、大変だと思うがアーティストがその場にいて説明をしてくれる、または制作意図があると分かりやすいと思う。その辺はどうなのか。
芹沢ディレクター	ベストなのはアーティストの常駐だが、他の芸術祭に比べても、アーティストが実際ここを訪れて作った過程において、説明する機会は比較的多かったと思う。アーティスト・イン・レジデンスだと、海外の方なので言葉の問題はあるが、なるべくアーティストが市民の方々の前に立つ努力は行ったつもりである。しかし、作品の制作には時間がかかるので、説明のために時間をかけることは理想ではあるが、できてはいなかった。質については、いろいろな考えがあるが、初めて見るときに「何だか分からない」という意見は、さいたま市に限らず出てくるものである。今回、私が言うのは気が引けるが、美術界の人たちからの評価は非常に高い。大型の国際芸術祭は通常１００くらいの作品があるが、今回は３４にしたので、一つ一つをアーティストと丁寧に作れた。このことは評価してもらっており、アーティストの中でも、今までの中でも傑作だと言われていると耳にしている。専門家が評価すればよいと思っているわけではないが、今後、質を落とさずにどのようにみなさんに伝えていくのかは、どこでも苦労していることであるが、一番重要な指摘だと思っている。
委員	初めての試みでとまどう部分もあるであろうが、問題は３年ごとということで、芹沢さんも市の担当者も含めて訴えたい。あまり先のことを言っても仕方ないのだが、今回の第１回はもうすぐ終わるが、３年後に向けての間、現代アートや想像力等に対してせっかく芽生えかけてきた市民の意識を、またこれだけ

	の予算と労力をかけてきたのだから次回に向けて、継続的にどのようなことをやっていくのか、その辺の考えがあるか聞きたい。
事務局	あえて分かりにくいトリエンナーレという言葉を使用した理由として、トリとは３という意味であるが、３年毎に開催していくという意思表示をしたかったからである。国際芸術祭とはせずに、さいたまトリエンナーレとしたのはそのような理由で、３年毎に実施していくつもりはある。 一方で、議会に予算を認めてもらわないと事業はできない。今回初めての試みのため、いろいろと苦労した。職員の残業時間の問題、契約、許認可等あり、直すべきところは直しながら、反省すべきは反省しながら次回に向け、どのような形がよいのかこれから検討していく。サポーターの方々は、おかげさまで1,000 人近く登録いただいている。こういった方々には、さいたま市の文化芸術の底支えをしていただきたいので、サポーターに向けた来年度予算は計上していく予定である。広い意味で人材の育成は文化芸術都市創造計画に盛り込んでいるので、少しずつではあるが、トリエンナーレをきっかけとして、様々なプラスの部分は延ばしていきたいと考えている。2020 年の東京オリンピックの文化プログラムも視野に入れていくつもりである。
芹沢ディレクター	一点補足すると、私も、５から６つの都市レベルの芸術祭に関与してきた経験から申し上げるが、今回はサポーターの方々の熱意が、全然違うというと言い過ぎかもしれないが、1,000 人くらいの登録のうち、中で動く人は 40～50 人だが、その 40～50 人がものすごくパワフルで、このような経験はあまりない。横浜トリエンナーレに比べても、作っていく過程に積極的に関与しようというそれぞれの意識がこんなに強いのか、と思った。 この間、あいちトリエンナーレでボランティアをしている人が見に来た。あいちの場合には、システムがきちんとできており、進行するときにスムーズにいくが、ボランティアとして関わる人の年齢が高い。さいたま市は各年齢層がちょうどうまくバランスが取れていて、さいたまはすごい、面白いと思うとおっしゃっていた。サポーターで加わってくれた人々がトリエンナーレの財産だと思っている。私が言える範疇は超えているが、この人々がトリエンナーレが終わったからといって去ってしまう

	のではなく、何か求心力を持ち、これからの３年間、ずっと続いていくようにすれば、市民が作っていくトリエンナーレというものに近づいていく気がする。文化振興課にもお願いしたい。
事務局	さいたま市としては、また実施したいということ。不思議なことにボランティアの素地がある、ということをディレクターから教えてもらった。今まで見ていると、一方的な新聞記事等で、スタートからあまりプラスの意見が発信されていなかった現状がある。願わくばだが、市民の皆様方から、もう少しで分かりかけている、さいたま市はいろいろできそうではないか、意気込みを買うよ、といった、背中を押していただけるようなご支援があれば大変ありがたい。
委員	熱心なサポーターについて、３年後にまた行うのであれば、文化振興課にお願いしたい。私は岩槻のことしか分からないが、協力に一生懸命になるのは良いのだが、その人達だけでその部分を囲ってしまい、他に漏らさないという体質があったのではないか。全然浸透されないというのはそこにあると思う。その辺は考えてもらいたい。
芹沢ディレクター	分かりました。その方々が、他の市民の方とアートをつなぐ役割をしてくださると理想的だとは思う。
委員	芹沢さんの話を聞いて、そういうものだったのかと今、分かった。生活に根付いているところと、現代アートというコンセプトが素晴らしい。そこが最初の段階で伝わっていないので、いきなりエキセントリックなものばかりが出てくる、そこでどうしても周りの市民の方は、何が始まったんだろうと理解ができない。ここに一つキャッチコピーがあれば分かりやすかったのかもしれないが、そこがもうちょっと何かできたような気がする。大友良英さんが出ているってそういうことなんだ、日比野克彦さんが最初に始めたのもそういうことなんだ、と非常によく分かる。 また、サポーターが非常に多いことや、現代美術の関係者からの評価が高いことなどをこれから KPI として発信していくことがすごく重要だと思う。それが次につながる気がする。 もう一つ、ここに自由に参加できるグランプリのようなものがあって、最終的に市民の方の誰か、それが小学生であろうと美大生であろうと、絵を画いている人、ジャズミュージシャンであろうとよいのだが、美術、アートというところに狭くなる必

	要はないが、その人達がさいたまトリエンナーレの一つのアートを最後に選ぶというようなことがありつつ、これに参加できたらよいと思った。
委員	浦和駅の近くに住んでいる。さいたまアートステーションはいつ行っても暗く、閑古鳥が鳴いていて、時々人がいると思ったら、近所の子供がやってきて、どんぐりと落ち葉で工作している。こんなことだったら公民館でもできるのに、なぜ目抜き通りの、あんな面白いところで、ポスターとパンフレットを置いて、はい、みなさん、来てください、としているのか。誰も来ないと思う。浦和在住が長いから知っているのだが、アートステーションの場所は昔、戦後の闇市で、いかがわしいが面白い通りだった。あそこだけ浮いている。個人商店の飲み屋も面白いことをやっている。そのようなところを市の人は実際に歩いて見たりしたのか。空気やにおいを感じたのか。自分達の行っているプロジェクトがそのようなところでやっていることを感じたのか。
委員	私も同感である。突然、現代アートですと言われても、なんとなく違和感を持ち続けて今日まで来てしまったと思う。どうも、一歩踏み出せない。市民の自然な感情だと思う。どうしても違和感をぬぐいきれないでこの時期を過ごしていると思う。そういうことを感じて仕方ない。せっかく良い催しであり、大変な予算もかけているのだから、その土地の人の新しいものに対する教育というのか、理解への道筋を丁寧につけていく過程が大事だったのではないかと思う。土地のところが抜けてしまったような気がする。
委員長	ありがとうございます。時間がなくなってきた。 私もいろいろな場面でさいたまトリエンナーレに関わっているが、きちんと見ていただけると実は良い作品が結構ある。土地のことを語っている作品もたくさんある。一方、今回、いろいろな形で携わらせていただいて感じたのは、コミュニケーションの難しさで、これはすごく難しい。良かれと思ってそれぞれの方が尽力したにも関わらず、届かない。少し説明してくれれば分かることを、そこが抜け落ちたがために分からない、ということが非常にたくさんあった。それは次の課題とするしかないが、具体的に何が足りなかったかということは、やっていることを振り返ることでしか次へつなげることはできないと感じ

	ている。 私はこの周辺の作品を何回も見ているが、好きな作品がたくさんある。すごく面白いと思っていただけると思っている。そのようなことをきっかけに、次へつながればよいと思う。 では、トリエンナーレ会場に移動する。

南区内において、トリエンナーレ会場の視察を実施。

５　閉会

さいたま市スポーツ文化局文化部文化振興課
電話８２９－１２２６
Fax８２９－１９９６

平成 28 年度第 1 回文化芸術に関する意見交換会　　意見書概要

1　施策集について

・資料の見せ方については、それぞれの施策や重点プロジェクトの全体像（ボリューム）が見える図表などで示していただき、それが年度ごとにどのように推移しているのかを比較できるようにしていただけると良いと思った。

・７つの基本施策については、部分的な増減はあるものも、順調に推移しているように見受けられた。まとめにおいて伝統文化や施設充実などにかかわる施策の事業数の少なさが指摘されていたが、様々な外的要因が考えられるので、一概に数字に注目するだけでは問題に対応できないように感じられた。

・重点プロジェクトについては、トリエンナーレ関連の事業をある程度（例えば作家や内容、ジャンル、地域など）分けてカウントしなければ、その他の事業との整合がなされず、実態を把握することにつながらないように感じた。

・全体を通じては、それぞれの事業の内容や規模にばらつきがある中で事業数を用いて分析することに違和感を禁じ得ない。「心豊かな暮らし」の実現を目指す多様な施策の実態を把握するには、数より質をあぶりだす方法の確立が必要と考えられる。実際は部分的な調査になると思われるが、事業の実施前後に聞き取り調査などを行い、何らかの指標に基づいてその効果を分析する取り組みが望まれる。まずはその指標づくりから検討を開始することを提案したい。

・人形資料購入は、歴史ある人形資料と共に、現代の資料収集もお願いしたい。

・さいたま市には盆栽、漫画、人形、鉄道などの魅力ある文化があるが、身近にありすぎて、なぜそれらが地域に根付いているのか、歴史等を知るチャンスは意外と少ないように思う。市民（特に小学生たち）がさいたま市とそれらの文化のかかわりや歴史を学ぶ機会をもっと増やしてもよいのではないかと思われる。そうした歴史を学ぶとより自分達の住んでいる町が好きになり、誇りが持てるようになると思う。地元のことを改めて知る機会の創出を増やすのもよいと思う。

・各種事業の区分が分かりづらい。例）「子供の感性の向上」と「文化芸術に対する理解及び関心の促進」（鑑賞機会の充実）は重複するのではないかと思う。

・平成 28 年度版のまとめを拝見すると、「盆栽」「漫画」「人形」「鉄道」の魅力的な重点資源に関する連携事業が年々少なくなっていると記載されているが、今後どのように連携を進めるかその方策を検討するに際し、なぜ連携事業が年々少なくなっているのかその理由や背景が分かると良いと感じた。計画の目指す将来像である「まちづ

くり」の視点を考えると、個別事業の推進ももちろん重要であるが、トータルでの「さいたま市」のイメージ形成に向けては連携事業もより推進されることが望まれると考える。

・縦割り事業の功罪の、同じような施策を別々な管轄で、別々の予算を費やして行うのは非効率だと感じる。是非とも今後は、さいたま市が責任を持って全体を俯瞰して費用対効果も検証し、無駄を改善していただきたいと思う。

・いろいろな分野で様々な施策を実施されているのに、市民をはじめ他の地域の方にも情報発信が出来ていないものもあるのではないか？勿体無いと思う。

・文化芸術に対して、広義な意味においての視点とバランスが大切だと思う。施策は広範囲に網羅されて大変よいと思うが、それぞれが希薄にならないよう注意する必要がある。

・施策１については文化芸術の根本の支軸にぶれないよう考えていくべきと思う。

・施策４，５は数が多い反面、さらに内容の充実を深められればよいのではないか。

・施策７は、施設の充実数が少なく、積極的にすすめていただきたい。

・市のどんな事業も一度ではなかなか効果が上がるものでないと思う。知恵を出し合い改革とスピード感を！特に目的意識追及することが大切でしょう。先ず継続！

・国際盆栽シンポジウムは今後も三～四年に一度、さいたま市において必ず開催することが文化芸術都市としてふさわしい。

・施策２の文化芸術に対する子どもの感性の向上については、特に幼児期における良質な音楽、絵画等に接する機会を更に高める努力をお願いしたい。

・施策７の文化芸術活動の場となる施設の充実については、文化センターを文化芸術都市創造の拠点機能施設と位置付ける必要がある。南区、浦和区の人口数と近年の同地区での良質なマンション建設のラッシュぶりからも、これからさいたま市での特にインテリジェンスな街にふさわしい文化芸術の拠点としたい。

・施策６での見沼田圃の活用、創造事業については、見沼田圃を札幌のモエレ沼公園のような現代アートの常設展示公園の建設を計画してはどうか。

2　さいたまトリエンナーレについて

・アーティストによる作品群は、身の丈に合った誠実な作品が多く、派手さはないが見ごたえのある内容となっていたように感じている。また市民プロジェクトや連携施設プロジェクトなど地域の潜在能力を積極的に活用する枠組みも新規性の高い試みといえると思う。実際に参加していただいた方々に対しては、さいたま市やこれからの日本を考えるきっかけを届けることができたと思う。

・問題点を挙げるとしたら広報とアテンドに多くの課題を残したように感じている。会場構成が複雑で多岐にわたっているため、チラシやガイドブックを読み込まなければ状況を把握できないようになっていたし、現場の案内（サイン）やアテンドを担う人材の資質や人数についても適切だったとは言い難く、非常に不案内で、ある程度土地勘があるか、高いモチベーションがないと会場にたどり着けない状況があったように思われる。

・せっかく入場料を無料にすることで地域や県内の方々に複数回、来場していただくことを想定していたと思われるが、結果としては思ったほどの効果を上げることはできなかったのではないか。重ねて充分な準備のないまま、市街でアートを展開したため、無用の物議を醸しだすことにつながったようにも感じている。

・今後仮に次回があるとすれば、腰を据えて地域社会と向き合う姿勢を（徹底的に市民と対話しながら企画を検討・実施する体制を踏襲する。）とるか、基本的に美術館などの特定の施設内で展開する体制に変更するかの、二択となるように思われる。まずは全体を把握する詳細な資料を作成し、会期中に何が起こったのかについて多角的に分析することが今後の指針に繋がると考えられる。

・会場が大きく３つのエリアに分かれているため、１日でめぐるのは難しかった。

・ガイドブックの解説を読んでもわからない部分が多いため、ガイドツアーは作品の意図などがわかり非常に楽しい。また、アーティストの作品の制作過程や苦労した点など、作品の裏話的なものがわかるとより作品に興味を持って鑑賞できるのではないかと思った。

・一般市民に果たしてどのくらいトリエンナーレが認識されていたのか、アンケートを取ってみた方がよいと思う。

・岩槻エリア、大宮エリア、武蔵浦和エリアという３つのエリアが今回あったが、それらを“サテライト”とした場合のトリエンナーレの楽しみ方をアドバイスするような“コア”になる施設があってもよいのではと思った。

・第１回目ではあるが、事前のPRに問題があったように思う。岩槻会場周辺においても、開会２ヵ月位前であっても区民のほとんどに浸透していないようであった。

・関係者、熱心なサポータの皆さんの取り組みには、敬意と感謝を申し上げるが、団結と囲い込みが強く内容等についてもみえてこなかった。

・周囲の意見で、作品が難しいとの声が多かった。

・出来る事ならばアーティストの意図や説明がつけば最高。会期も、もう少し短縮し展示会場のコンパクト化とアクセスが問題。

・北浦和図書館の一般向け勉強会で、うらわ美術館の学芸員のトリエンナーレに関する講演があり、その際も参加者から、解説付きのツアーがあると良いとの意見が出ていた。

・スタンプラリーをきっかけに、市民でありながらこれまで行ったことのなかったスポットにも足を運ぶきっかけとなり良かったが、一方で、スタンプラリー台紙・アートマップ・スタンプラリーマップ、などツールが多く、分かりにくいと感じることも多かった。

・ロゴデザインは一見スタイリッシュな都市型のトリエンナーレの雰囲気があるが、一方でイメージキャラクターの「さいたマムアン」は一昔前のなつかしさを感じさせる風のデザインとなっており、さいたまトリエンナーレのコンセプトが最終的にどういうテイストのものだったのか、分かりにくくなってしまっていたように感じた。

・日常に現代アートを融合させるというトリエンナーレのコンセプトはとても興味深く、だからこそ斬新でイメージが固まっていないアーティストを選定、全て新作のみ、大友良英さんのようなフリースタイルの音楽家も参加している訳だと、芹沢ディレクターのお話を聞いて腑に落ちた。

・次回に向けて老若男女アートに野心を持った市民がもっと面白がって参加できるイベントアイデアの余地はあると思う。トリエンナーレ終了後に総括のお話を聞く機会があればよい。

・社員の中でも多数が「さいたまトリエンナーレ２０１６」について未だにどんなイベントなのかを把握していない。理解しづらいようだった。

・芸術にたけている地域と違い（さいたま市だけではないが）市民が置いてきぼり状態になっていると思う。まだトリエンナーレ開催には時期尚早だったのではないか？

・トリエンナーレは言葉も難しいので、もっと宣伝に力を入れるべきだったのではないか？

・残念なことには、トリエンナーレを知らない市民が多いこと。いかに広く市民の意識と自覚と共にあるトリエンナーレを目ざすか重要かと思う。

・改革と継続を望む。

・認知度について、私はシニア大学に参加活動しているが、仲間たちにトリエンナーレ開催を紹介しても「なにそれ」という方が大半であった。高齢者には縁遠い企画だったのではないか。高齢者にも伝わる「媒体」の再考と、「興味を抱くメディア戦略」の工夫、テーマ「未来の発見」であったが高齢者視点での興味深い作品や企画が少なかった。

・東武鉄道による演劇を観たが、プレとはいえ完成度(本番２日前)がまだ低い感じであった。演劇を通じて何をアピールしたいのか、理解できなかった。

・３年後の開催に向けた継続的な市民の意識向上をはかる地道な活動が必要かと思います。例えば、市内の公民館を利用して、継続的に小規模な現代アートの展示とか、市内のアーティストのパフォーマンスなどを催すと良いかと考える。

・ガイドツアーは貴重な体験だった。